

L09c

## 2013年ペルセウス座流星群の永続流星痕の高度検出

比嘉義裕（日本流星研究会）、戸田雅之（日本流星研究会）、佐藤孝悦（日本流星研究会）、佐藤信（仙台天文同好会）

流星痕は、流星出現後に、その飛跡に現れる分子雲である。これまでの観測結果によると、流星痕の多くは非常に淡い発光であること、肉眼で確認できるほどの光量の流星痕はマイナス4等以上の高速流星でないと出現しないこと、などが経験的にわかっている。しかも肉眼で感知できる流星痕は、年間数例しかない。ペルセウス座流星群は、対地速度が59km / 秒の高速群であり、毎年多くの出現数が認められるため、永続流星痕の出現が期待できる。2013年は月齢条件が良かったため、観測好機だったが、全体的に流星出現数は低調だった。それでも2例の火球同時観測が成立し、その永続流星痕が記録できた。本発表では、上記を解析し、その出現高度を求めるとともに、過去の流星痕の出現高度と比較し考察する。